かささぎ通信 第145号

毎月第2金曜日 13：30～15：30　　2025年 3月 14日 発行

刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

２０２５年２月の「森三郎の作品を読む会」では、「竹馬与市」（『雪こんこんお寺の柿の木』１９４３年１２月）、「茂作」（『赤い鳥』１９３３年１２月号）を読みました。

『雪こんこんお寺の柿の木』は書き下しの作品集ですが、全二十作の内、今回読んだ「竹馬与市」は唯一『赤い鳥』に掲載（１９３２年４月号）の作品です。酒井晶代先生が『森三郎童話選集　かささぎ物語』（１９９５年、刈谷市教育委員会・中央図書館編）の「〈解説〉森三郎・人と作品」で説明されています。同書にはこの「竹馬与市」も収録されているので、「作品を読む会」でもこれまでに何回か取り上げてきました（本会通信12号、72号参照）。

与市はお月さんの孫で、身の丈三寸くらいの小さな体でいつも小さな竹馬に乗っています。おじいさんおばあさんの子どもになるためにやって来た十五歳の男の子です。おじいさんおばあさんの生活を助けるのでもなく、竹馬に乗って遊んでいて二十歳になる頃、村で一番のお金持ちの家の砂子姫子をお嫁さんに欲しいと言います。その日暮らしの貧乏な立場ではそんなことは無理だと言われ、納得できない与市はだだをこね、癇癪をおこして竹馬で二人をなぐりつけます。読んでいると、この場面が一番ひっかかるところです。読者が「それはいけない」と思う間もなく、「そんなことをすると山姥がきてつれていくよ」と二人が言うか言わないうちに山姥が与市をさらっていきました。

やまんばの住処に着くと、与市はそれまでとは打って変わって知恵を働かせ、山姥所持の不思議な砂の力で当たり前の人間の大きさになり、山姥を退治して家に戻ります。山姥の持っていた大判小判を手に入れた与市は望み通り砂子姫子を嫁に迎えておじいさんおばあさんと四人で睦まじく暮らしました。

ここまで読み通すと、『赤い鳥』掲載の「竹馬与市」の時に感じた与市の気短で横暴な振る舞いが少ない事に気付きました。『赤い鳥』の「竹馬与市」の読後感として、小さい与市を大事に育てるおじいさんおばあさんに対し、気に入らないことがあると癇癪を起こして、すぐに竹馬で二人をなぐるという設定が、お話の世界のこととは言え、どうにも理不尽で納得がいかないという声がよく聞かれました。今回の『雪こんこんお寺の柿の木』収録の「竹馬与市」では、与市が竹馬でおじいさんおばあさんをなぐりつける描写は一回限りで、それをきっかけに山姥が登場し、山姥と与市の知恵比べに話が転換し、与市は竹馬で山姥の弱点をついて打ち倒します。体の小さな与市にとっていつも乗っている竹馬は自分の命を守る大事な道具だったのです。今回の作品では、それを無駄な暴力に使ってはいないのです。少し理屈っぽくなりましたが、『赤い鳥』１９３２年４月号の「竹馬与市」から十一年後の『雪こんこんお寺の柿の木』収録作には、作者の心の変化もあったのではないでしょうか？

『赤い鳥』版は「むかし三河の依網といふ浜ぞいの小村に」と舞台を紹介していますが、『雪こんこん…』では特定の地名は記されていません。「依網」の名は「ねんねころ市、竹馬与市…」の歌の中で、「依網長者の弟姫さま」という名前で残してあります。「竹馬与市」の名前については「かささぎ通信」29号、72号で取り上げました。

『赤い鳥』掲載「茂作」（１９３３年１２月号）の主人公・茂作少年は四年生で、裏町の長屋に住んでいるおでん屋の子です。夕べ割引きで見た活動、軽便鉄道の停車場などの言葉から、小さい田舎町の風景が浮かんできます。森三郎の作品の中に似たような風景がありました。「乳母」（『赤い鳥』１９３３年８月号）も町の小さな寄席に活動がかかった時の話です。「雪」（『赤い鳥』１９３３年４月号）の書き出しは玄関に「写真入りの活動のビラ」が落ちていたという描写です。作者の胸中には町の劇場で見た活動の思い出が残っているようです。

〈次回予定〉２０２５年４月11日（金）午後一時半～三時半
「五年のころ」（『赤い鳥』１９３３．１２）
「をみなへし」（『雪こんこんお寺の柿の木』１９４３．１２）